**又四郎のナシ**

このかつての所有者にちなんで名付けられた梨のような古い果樹は、白川地域の庭によく見られる。梨、柿、栗、クルミなどの果物や木の実は、耕作地の少ない白川の食文化において、伝統的に重要な役割を果たしてきた。その中でも、果物やナッツの保存食は、多くの村人にとって一年の中で最も重要な食事である「報恩講」（この地の代表的な仏教宗派である浄土真宗の大切な祭日）のご馳走に欠かせないものだ。

報恩講は、浄土真宗の開祖である親鸞（1173-1263）を偲ぶとともに、家族が集まって一年の感謝を捧げる行事で、11月から12月にかけて行われる。報恩講の食事は、仏教の戒律に基づいて作られた精進料理で、豆腐や野菜を中心に、お茶と果物や木の実を使ったお菓子（チャノコ）が出される。この保存食に使う果物は、昔から各家庭の庭で栽培されていた。庄川流域に点在する古い果物の木は、何世紀にもわたるこの習慣を思い出させてくれる。